

小川政弘作 「さようなら 啓介」

根岸ゆかり わたしたちの高校生活も、あと残りわずかね。

土田啓介 うん。卒業式まで、あと1週間だ。4月になると僕も晴れて大学生だもんなあ。大学に入ったら何するかなあ。もう今からなんとなくワクワクするな。ところで、練馬予備校の入学試験はいつなんだい？

ゆかり 卒業式の次の日よ。

啓介 じゃあ今からしっかり勉強しとけよ。

ゆかり そんな、そんな言い方しないでよ。

啓介 だってさ、君はこの1年間、あんまり勉強しなかったんだから、まあ予備校で1年間みっちり勉強するんだな。

ナレーション ここは卒業式を1週間後に控えた青春高校。根岸ゆかりと土田啓介とがそんな話をしているころ、3年B組では――。

クラス (ガヤ)

HR委員 静粛に、静粛に！ 我が3年B組の諸君。卒業式を1週間後に控え、ホームルーム委員として、最後のご奉公をさせていただきたいと思う。

クラス (ガヤ)

HR委員 卒業式が終わってから、我らの高校生活に別れを期して、コンパをどこかで持ちたいと思う。

クラス (歓声)

HR委員 コンパでは我が3年B組の誇る青春高校の“ベストカップル”によるデュエットなどで、楽し〜く過ごしたいと思うんだが。

女子 ねえ、あの二人、いないわよ。

男子 どうせあの二人だ。どっかで二人だけで楽し〜く過ごしてんだろうな。うらやましいよ。

女子1 そんなに和気あいあいじゃないわよ、あの二人。このところ陰悪なんだから。

女子2 そうよ。ゆかりは大学落ちたんだから。

和美 (息せき切って) 大変大変、一大ニュース！ ベストカップルが決裂か？ 今月の大スcoop！

HR委員 またお前はのぞき見してたな？

クラス (笑い)

和美 ごめんごめん。そんなににらまないでよ。でも我が3年B組の諸君、このようなベストカップルの状態に、我はいかに対処すべきか。

男子 おい、そんなに騒ぎ立てるなよ。あの二人のことだ。案外楽しんでるんだよな。おれは寂しいよ。

HR委員 おい和美、“決裂”ってどういうことだよ？
和美 もうすさまじいのなんの、ロゲンカ。「君は1年間遊んだんだから、予備校でまじめにやれよ。僕はこの1年間、しっかりやって、報いられて第1志望に入れたんだから。」って。ああ、土田啓介の、なんと冷たいその言葉。

HR委員 心配だな。おれ、ちょっと行ってくるよ。
女子 あ、わたしも行く。
和美 人のこと“のぞき見屋”呼ばわりして、結局自分だって見たくてしょうがないんだから。フン！

ナレーション そのころ、当のご両人、土田啓介と根岸ゆかりとは――。
(音楽) (ブリッジ)

ゆかり それじゃ、まるでわたしは1年間、遊んで過ごしたみたいじゃないの。
啓介 君はそうじゃないとでも言うのか。日曜日に「練馬予備校のテストクラスと一緒にいこう」と誘ったら、君はなんとやったか覚えてんのかよ。「いいえ、わたしは日曜日には教会に行くので行けません。」ってね。さすが余裕のある人は違ったよな。練馬のテストクラスはもう受験界では最高権威のクラスなんだ。それを捨ててまで教会に行ったんだぜ。笑わせるなよ。“困ったときの神頼み”か。ハン。受験はやっぱ実力のある者が笑うようにできてんのさ。毎週勉強もしないで拝みに行ったキリスト様が、君の受験の何になったよ。人間が月に行くこの20世紀に、今更神もヘチマもありゃしないよ。いるのは、同じカミでもせいぜいトイレトペーパーさ。

ゆかり (さえぎって)もうやめて！
啓介 少し頭を冷やせよ。
ゆかり いい加減にやめて！ もう知らない！
(音楽) (ブリッジ)

HR委員 あれ、ゆかりはどうしたんだよ？
啓介 どっか行っちゃまったよ。半ベソかいてな。
HR委員 お前もずいぶんひどいこと言ったそうじゃないか。
啓介 ひどいこと？ ひどいのはどっちだよ？ 向こうだよ。フン、教会様々で、日曜日には会ってもくれなかった。僕は4月から大学生さ。彼女は浪人だもんな。もうお互い関係なんかないや。

(効果音) (女子2が「バシッ」と啓介を平手打ちする音)
啓介 いってえ
女子2 随分ひどいじゃない。ゆかりが浪人するんだから、それを慰めてあげるのがボーイフレンドの役目じゃないの？ 見損なっちゃったわ。“まさかのときの友こそ真の友”っていうのに。

ナレーション ゆかりと啓介との間に溝が入ったのは、決して大学受験成功と失敗の明暗だ

けではありませんでした。2年間も交際していて、“ベストカップル”の誉れを受けられていた彼ら二人の心が次第に離れ始めたのは、二人が3年の6月ごろのことでした。

(音楽)

(ブリッジ。回想)

ナレーション

そのころ、彼女にとって彼は、非常に心の慰めになっていたものの、受験勉強、大学受験に対する疑問の渦が、心の中で大きく広がりつつあったのです。彼女は、駅前でもらったピラを頼りに、生まれて初めて近くの教会の敷居をまたいだのでした。初めてのことで、戸惑いはしたものの、心を引きられるものを感じ、何回か続けて行ってみました。啓介も誘ったのですが、彼は全く意に介せず、相手にしませんでした。そのうちにゆかりは、その教会であった伝道会で、イエス・キリストを救い主として受け入れたのでした。

啓介

おい、ゆかり。もう夏休みだし、本腰入れて勉強したほうがいいぜ。教会行ってなんの役に立つか知らないけど、少なくとも受験の助けにはならないぞ。今度さ、僕、練馬予備校のテストクラスに行こうと思ったんだけど、君も一緒に行かないか？

ゆかり

テストクラスって、確か、日曜日の午前中でしょ？

啓介

そうだよ。あんまり希望者が殺到するんで、苦肉の策として日曜日の午前中に変えたらしいんだ。でも、受験生に日曜日もヘチマもないから、関係ないだろ？

ゆかり

そんな人気のあるクラス、取れるの？

啓介

うん、実を言うとね、僕の親せきの方が働いてるんで、その気になれば潜り込めるんだ。どうだ、行こうよ。

ゆかり

ダメよ。日曜の朝は教会に行くんだから。

啓介

「教会教会」っていい加減にしろよ！ 君は受験生なんだぜ。しっかり勉強しないと、行きたい大学に入れないうぞ。あの大学に行かないと、君の夢もオジャンじゃないか。

ゆかり

でもわたし、そんな自分勝手なことできないわ。イエス様はわたしのために死んでくださったんだもの。そのイエス様を礼拝する週に一度の大切な日を犠牲にして、イエス様を裏切るなんて…。できないわ、わたしには！

啓介

「イエス様イエス様」って、ずいぶん好きだね、君も。あんなのデタラメさ。神様だとか、聖書だとか、あんなの神話に決まってるじゃないか。ナンセンスだよ。神が人のために死んだり、死んだ人間が生き返るなんて、だまされてるんだよ、君は！

ゆかり

そんな言い方しないですよ。わたしには、はっきりそれが真実であるって分かるのよ。聖書を読んだり、教会に行ったことのない、そして何よりもイエス様に会ったことのないあなたには分からないのよ。ねえ、テストクラスに行くのやめ

て、教会に来てよ。

啓介 僕にいま必要なのは勉強さ。一にも二にも勉強。あの大学に入りさえすれば、バラ色の大学生活が僕を待ってる。そしてその後の僕の人生は安泰さ。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション このような会話をしてから早くも半年。大学受験も終わった今、かろうじてこの二人を結びつけていた糸は、プツンと切れてしまったのです。

ゆかり(モノローグ) 啓介のバカ。大学に入れたもんだから、もう鼻高々じゃない。わたしは、入りたい大学に入れなかったわ。危ないとは思ったけど。そしてついに、わたしの親愛なるボーイフレンドの見捨てられてしまった。本当に好きだった。今も好きよ。それが、それが…(涙ぐむ)。もうわたしには何も残っていない。あまりにも代償が大きかった…。

ナレーション ゆかりの心の中には、高校1年になって、初めて啓介と知り合ってから、この3年間のさまざまな思い出が、まるで昨日のことのよう、次々に浮かんで消えました。

(音楽) (悲しい感じ)

ゆかり(モノローグ) さようなら、啓介。あなたに会えたこと、そして3年間の思い出。たぶん、いつまでも忘れないわ。でも、“出会い”が人生にあるように、“別れの時”もあるのね。あなたは自分の道を歩いていく。そしてわたしもこれから一人で自分の道を…。

ナレーション その時、ゆかりの心にまるで稲妻のように、一つの聖書の言葉が響いてきたのです。

聖書の言葉 (エコー) わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない。見よ、わたしは世の終わりまで、あなたと共にいる。

ゆかり(モノローグ) そうだわ。イエス様が。わたしにはイエス様がいらっしゃる…。

ナレーション 別れの痛みの中で、ゆかりは、主イエスの愛が、やがてその傷口の一つ一つを覆ってくださるに違いないことを、予感していました――。

<完>